

背負われているわたし

山崎道子

奨励者紹介〔やまさき・みちこ〕

日本キリスト教団豊中教会牧師

数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、四人の男が中風の人を運んで来た。しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかった。イエスが家におられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を賛美した。

(マルコによる福音書 2章1—12節)

「炎上」騒ぎ

今日の聖書には、とんでもないことをしてかした男たちの話が出てきます。

イエスが宣教活動を始めたばかりの頃。イエスは真っ先に、病気の人や世間から見捨てられた人のところに行き、彼らを癒していました。ところが、イエスが次々と病人を癒していると噂が広まってしまい、村中の人がイエスのところに押し寄せて、イエスがいた家の中からドアのところまで人で一杯になってしまったのです。

そこへ、中風という病気で体が麻痺した人を、その友人たちが担架に寝かせたまま運んで連れて来ました。ところが、家の中は満員で入れない。そこで彼らはその家の屋根をはがして、病人を担架に寝かせたままイエスのいる場所の目の前に天井からつり降ろしたのです。

ちょうど先日、何気なくテレビのニュースを見ていたら、あるユーチューバーが渋谷のスクランブル交差点のど真ん中にベッドを運んできて動画を撮影し、警察に捕まったというニュースがありました。彼らの動機は、ただ「面白いことをやりたかった」ということだそうです。おそらく炎上狙いで有名になりたかったのだと思いますが、1ミリも面白くありません。そんな彼らの不純な動機とは全く違いますが、ベッドをあり得ない場所に運び込むという、とんでもないことをしてかしたという点では、今日の聖書の話と状況だけなら似ているかもしれません。

もし、皆さんがこの光景を目撃したらどう思うでしょうか。家を壊すなんてひどいと腹を立てるか。屋根の損害や修理代を気にするか。あるいは、「あなたたちの気持ちは分かるけれど、これはやり過ぎでしょう」とたしなめるでしょうか。それとも、順番ぬかしをした彼らを「ずるい」と非難するかもしれません。いずれにせよ、その場にいたほとんどの人は、この常識はずれの男たちに対して否定的な感情を抱いたに違いないと思うのです。現代であれば、きっと誰かがスマートフォンで撮影した画像がネットに流れて「大炎上」するかもしれません。

イエスが見たもの

ところがイエスは、目の前の病人に向かって「罪の赦し」を宣言されたのです。見ていた人には訳が分からなかったに違いありません。でも、もしあなたがこの病人本人だったら、と想像してみてください。担架で運ばれるくらいですから、あなたの病状は相当重いはずで。体は麻痺して動きません。衣食住のすべて、トイレも含めて、常に人の手助けを受けなければなりません。仕事もできず、外出も無理。みんなと礼拝することも、聖書の言葉を聞くこともできなかつたでしょう。

そんなあなたを世間の人は「罪人」だと言うのです。原因の分からない病気や治らない病気は、その人や先祖が罪を犯したせいだと決めつけられる理不尽さ。また、家族にも肩身の狭い思いをさせてしまっているうしろめたさ。この病人の苦しみは、単に体が動かないだけではなく、自分という存在を誰にも認めてもらえない「魂の飢え」であり「存在の苦しみ」でした。

イエスは、そのように存在を否定され続けてきたこの病人に、「あなたの罪は赦される」、神はあなたを見捨てられない、そう皆の前で宣言されました。それを聞いた病人本人も、連れて来た友人も、どんなに嬉しく救われた思いがしたでしょうか。

それだけではありません。居合わせた律法学者たちが心の中でイエスを批判したのを見透かしたイエスは、病人に「立ち上がって家に帰れ」と言われます。すると、病人が担架を担いでスタスタ歩いて家に帰ったのです。大変不思議な出来事です。

この場面。イエスは何を考えていたのでしょうか。イエスという人は、人間の常識や建て前に縛られずに、本当に大切なこと、目の前にいる人の心と真実をズバツと見抜く方です。これはあくまでわたしの想像ですが、もしかしたらイエスは、目の前のとんでもない光景を見て、怒るよりも、人が友だちのために「そこまでやるか」とビックリして感心したのではないかと思うのです。

人生における究極の選択

話は変わりますが、以前教えていたキリスト教学校の聖書の授業で、心臓移植を受けた女子中学生のニュースを話題にしたところ、偶然クラスの何人かの生徒が小学校の同級生だったことが分かりました。その女の子は、約1億円の募金を受けてアメリカで手術をし、その当時はすでに健康を回復して帰国していました。同級生だった生徒たちも、彼女のために募金をしたと言っていました。わたしはとても嬉しくなって「スゴイね」と言ったのです。ところが、次にその生徒が言った言葉を聞いて、わたしの心は一瞬にして凍りつきました。その生徒は、「だから、あの子の命は私らのお金のおかげなんやで」と、得意気に言ったのです。

親はきっと、我が子の命を救いたい一心だったのでしょう。でも、中には人にお金を恵んでもらってまで、そ

れも外国に行ってまで手術を受けることを非難する人もあります。でも、その家族はきっと悩んだ末、たとえ困難でも批判されたとしても、少しでも可能性のある方法を選ぶ決断をした。ある意味では、この国のルールを飛び越えてでも娘の命を助ける可能性にかけたのです。

自分ならどうするか、わたしには分かりません。昔の話ですが、わたしの幼馴染の家族は、中学生の息子がガンになった時、最後までそのことを本人にも兄弟姉妹たちにも知らせず、できるだけ日常生活を続ける選択をされました。その子は亡くなる直前まで、病気のことを知らずに普通に生きて、そして亡くなりました。親は、その選択が良かったのか悪かったのか、おそらく一生、今も問い続けて生きている。どちらを選んでも、心に重荷は残るのです。

赦しの宣言

先ほどの募金を受けて手術を受けた女の子は、命が助かって元気になりました。同時にこの子は、見ず知らずの多くの人にもらった募金で命を助けられたという事実を一生背負っていくことになる。さっきの生徒が発したような何気ないひと言に傷つくこともあるでしょう。また、自分の人生に果たして1億円の価値があるかと悩む日がくるかもしれません。病気が治ってめでたしめでたしではない。それは、彼女が一生負い続ける重たい荷物になるでしょう。

でも、イエスならきっと、募金で移植を受けた親子も、告知せずに子どもを見送った親子も、どちらの親子に向かっても今日の聖書と同じように、「あなたの罪は赦される」と宣言してくださるでしょう。世間の人のように、ただ批判したり裁いたりするのではなく、「あなたの選択、あなたの重荷は赦される。神はあなたを見捨てない。大丈夫だ」と言ってくれる。それがイエス・キリストの福音（良い報せ）です。

わたしたちは、いつもベストな選択ができるわけではありません。迷っているうちにタイミングを逃したり、あの時、ああしなければよかったとか、もっとこうしていれば、と、後悔する時もあるでしょう。でもイエスはいちいち、それは正しいとか正しくないとか、閻魔大王のように人の人生をただ評価して裁く怖い人ではありません。イエスは、わたしたちの選択が正しくても間違っている、思うように生きられないわたしたちの失敗や後悔も、まるごと赦して一緒に背負ってくださる。だから、わたしたちは安心してよいのです。

救いはわたしたちの間に

わたしたち人間は皆、自分がかわいいですから、最初は自分が救われたいとしか思わないかもしれません。でも次第に分かってくるはずです。救いというのは、わたし一人が天国へのパスポートを手に入れることではない。今生きているこの世界、家族や隣人と一緒に生きていくこの時間の中に、神さまの御心にかなう瞬間がくるということ。その救いの出来事をみんなと一緒に体験すること。人と人との不思議なつながりの中にわたしたちは置かれていて、時には思いがけないところで、誰かが自分のために祈ってくれていることに救われる。隣人との交わりの中で救われ、赦され、生かされている事実を知る。そんなふうにながら、やがてわたしたちは「我を救い給え」という祈りから、「我らの罪を赦し給え」という祈りへと、視界が広げられていくのではないのでしょうか。

救いはわたしたちの交わりの中に。平和はわたしたちの間に。そしてわたしたちの中心にはいつもイエス・キリストがいてくださる。そのことに信頼し、時には批判や「炎上」を恐れずに、大切な人の尊厳や救いのため

に勇気ある一歩を踏み出せる人になりたい。いつも誰かに背負われている自分だからこそ、いつか誰かの重荷と一緒に背負える人になりたいと、そう願います。

2019年9月25日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録